

## ジョージ・マクドナルドの作品における 天上の女神ソフィアの示すもの

— 「塔の上の曾祖母アイリーン」という母系的な王権女神を探る —

The Meaning of the Divine Sophia in the Works of George MacDonald  
Exploring “Great-great-grandmother Irene” as a Matriarchal Royal Goddess

長 田 恵 子\*

Keiko NAGATA

**要 約** 『お姫さまとゴブリン』（1872）またその10年後の続編『お姫さまとカーディ』に描かれているグレートマザーには「大地の母」では収まらないイメージが含まれている。作中の「塔の上の曾祖母アイリーン」には、「大地母神」の表象のみならず、ギリシア神話やグノーシス神話における「天上の女神ソフィア」のようなイメージが加味されているためだと考える。彼女は主人公のお姫さまの母系的王権女神でもあり、お姫さまが生まれたときから塔の上に住む守護神的な存在である。そのためマクドナルドのファンタジー作品には、水平軸上に広がる「大地の地母神的な女神」の表象の他に、天上を意味する塔という垂直軸上の「智慧の女神ソフィア」の表象であるグレートマザーがいることが考察できる。本稿において、マクドナルドが想像した天上の女神ソフィアのイメージを持つ「塔の上の曾祖母アイリーン」についての考察を進める。

**キーワード**：天上の女神ソフィア，カレドニアの母系制，王権女神，ドイツ観念論，グノーシス神話

**Abstract** The image of the Great Mother in “The Princess and the Goblin” and its sequel “The Princess and Curdie” extends beyond that typically associated with the Earth Mother. In both works, the heroine’s great-great-grandmother, who lives in a tower, not only embodies the essence of the Earth Mother but also personifies the divine figure of Sophia in Greek and Gnostic mythology. She is the matriarchal royal goddess of the heroine and a guardian deity who has lived in her tower since the heroine was born. Therefore, we can discuss how, in addition to presenting an Earth Mother who dwells on a horizontal axis, the two aforementioned MacDonald fantasies provide us with a Great Mother who is not unlike Sophia, the Goddess of Wisdom, and who resides on a vertical axis as symbolized by her tower, which itself alludes to heaven above. In this paper, I will discuss this tower-abiding great-great-grandmother.

**Key words** : The divine Sophia, Caledonian matriarchy, Royal goddess, German idealism, Gnostic mythology

### はじめに

ジョージ・マクドナルド（George MacDonald, 1824-1905）は、その特徴として生と死における普遍的な真理を母系的な女神像として表象している点にある。彼は19世紀のイギリスにおいてロマン主

---

\* 家政学部児童学科 学術研究員  
Department of Children’s Literature, Faculty of Home  
Economics Researcher

義に影響され、それらが好んで取り上げた神話や夢の世界を作品の中へ取り入れた。またノヴァーリスやホフマンなどのドイツロマン主義や、フィヒテやシュリングなどのドイツ観念論者に見られる新プラトン主義やグノーシス主義、神秘主義などにも影響を受けていた。マクドナルドはそれらのシンボルやイメージを使って、第一黄金期と呼ばれる初期ファンタジー文学を創り上げた一人となった。特に彼は祖母的なイメージのグレートマザーをどのファンタジー作品の中にも取り入れている。そのグレートマザーのイメージはどこから来ているのだろうか。

以前の拙著に、彼の作品である『ファンタステス』や『北風のうしろの国』などに現れる祖母の女神のイメージは、ケルト神話のダナやブリキッドやギリシア神話のデメテルのような大地母神の表象であり、またそれらはキリスト教の聖アンナや聖ブリキッドなどの表象と融合したグレートマザーであるという見解を示した。彼女たちは実りをもたらす大地、生命をもたらす水などを女神の属性として持っていた。

しかし、1870年から71年にかけて“Good Words for the Young”という雑誌に連載され、1872年に本になった作品『お姫さまとゴブリン』、またその10年後の続編『お姫さまとカーディ』（1882）に描かれたグレートマザーには「大地母神」では収まらないイメージが含まれている。それは何故かという、作中の曾祖母アイリーンには、「大地母神」の表象のみならず、グノーシス神話における「天上の女神ソフィア」のようなイメージが加味されているためだと考える。彼女は主人公であるお姫さまの先祖の曾祖母であり、お姫さまが生まれたときから塔の上に住む守護的な存在である。そのためマクドナルドのファンタジー作品には、水平軸上の大地の「地母神の女神」の表象の他に、天上を意味する塔という垂直軸上の「智慧の女神ソフィア」の表象であるグレートマザーがいることが考察できる。本稿において、マクドナルドが想像した天上の女神ソフィアのイメージを持つ「塔の上の曾祖母アイリーン」についての考察を進める。

## 1. 曾祖母アイリーン（塔の上のおばあさま）のイメージの源泉

マクドナルドは『お姫さまとゴブリン』の中で「塔の上のおばあさま」に「天上の女神ソフィア」のイメージをもたらした。マクドナルドの長男が書

いた伝記、『ジョージ・マクドナルドと彼の妻』によれば、マクドナルドが妻宛に送った手紙の中で、『お姫さまとゴブリン』という作品に非常に満足していたことが分かる。それはこの作品において、天上のソフィア的な女神像とその世界観を物語として表すことができたからではないだろうか。

### G.M.D. to his Wife

The Retreat, February 25, 1871

I have told him my story [*The Princess and the Goblin*] shall be finished in two months more... I know it is as good work of the kind as I can do, and I think will be the most complete thing I have done...<sup>1)</sup>

ボニー・ガーデン (Bonnie Gaarden) は、「白いハトは Holy Spirit (精霊) であり、曾祖母アイリーンの部屋の青い空は超越と無限を象徴する」<sup>2)</sup>と述べている。また、バーバラ・ウオーカー (Barbara G. Walker) は「ソフィアは聖書正典に取り入れられたグノーシス派の太母、女の英知の霊、アフロディテのハト (後に聖霊を表す) によって象徴される」<sup>3)</sup>と述べているが、「塔の上のおばあさま」もソフィアのシンボルである白いハトを飼っている。ハトたちは彼女に代わりカーディの母親をゴブリンから助けるなど多くの働きをしている。

また彼女は塔の上に住んでいるのだが、その部屋は銀の星をちりばめた青い空の中にある。銀の天使に支えられた浄化のバラの火を携えてもいる。そして丸天井の上の方で輝いている大きな丸い銀の月のランプはどんな暗い夜でもハト達が迷子にならないよう昼も夜も輝き、またそれが見える者だけを導き助ける。アイリーンには見えるが、しばらくカーディには見ることが出来ない。銀の月のランプは山の中で迷子になったアイリーンをその輝きで助けるのである。銀の月は女神の象徴であり、「智慧」そのものを具象化したものともいえるのではないだろうか。白いハト、大空、バラの火、銀の月などはみな天上の女神ソフィアのシンボルである。

カーディが「塔の上のおばあさま」の部屋を訪れると、その中は壁も床もなく、大空と星が輝いている夜の空間があるばかりであった。

Curdie opened the door-but, to his astonishment, saw no room there. There was the great sky, and

the stars, and beneath he could see nothing only darkness!<sup>4)</sup>

その部屋はまた宇宙のような天空でもあったのだ。そして「塔の上のおばあさま」は、マクドナルドが思い描く「天上の女神ソフィア」の表象であったのだ。

## 2. 王権女神とカレドニア族に残る母系制

「塔の上のおばあさま」は、主人公のアイリーンが生まれたときから守護神のように彼女を守っている存在である。はじめて8歳になったときにアイリーンは塔の上まで階段を上がり、おばあさまと出会うことが出来た。彼女は自分でも言うように、王女アイリーンの先祖にあたる女王であり、母系的な家系の源流である。彼女はこの王家を先祖代々守っている王権女神<sup>註1)</sup>なのである。

マクドナルドの故郷であるカレドニア (Caledonia) は、古ラテン語でグレートブリテン島の北部を意味する地方の名称である。ほぼ現在のスコットランドにあたる。スコットランドのラテン語名は「スコティア(Scotia)」である。

カレドニアという名称の語源はピクト人の一派でカレドゥニー族 (カレドニア人) から来ているが、ローマ帝国が名付けたことに由来すると考えられている。<sup>5)</sup>

ローズマリー・サトクリフ (Rosemary Sutcliff) は、彼女の歴史小説『王のしるし』(*The Mark of the Horse Lord*) (1965) の中で、この物語はカレドニア族のピクト人が勢力を保っていた時代の母系崇拜による戦いを描いていると言っているが、カレドニア人は大地の母の信仰を保ち続け、王の家系は母方の血筋を通して継承されていた。

In the years since they parted company, the Gael had become a Sun People, worshipping a male God, while the Caledones had held to the earlier worship of the Great Mother, and like most people with a woman-worship, they traced their family and inherited even the kingship.<sup>6)</sup>

その後5世紀に入り同じケルト系であるアイルランドからのスコット人 (自らはゲール人またはダルリアダ人と名乗っていた) の移住により、度重なる

戦いの末、ピクト人のアルバ王国は父権的なスコット人 (ゲール人) のダルリアダ王国によって征服され、9世紀にはスコットランド (Scotia) と呼ばれるようになる。しかしアルバ王国の母権的な世界観はずっと水面下に潜み続いていた。

Even in medieval Scotland it was quite common for a king's eldest son to find his claim to his father's throne after him indignantly denied by his sisters' husbands, who claimed that they were the true heirs by right of being married to the Royal Women.<sup>7)</sup>

またジョセフ・キャンベルの『神の仮面』(*The Masks of God*)<sup>8)</sup>にも「ケルトの神話と道徳の秩序は青銅時代の母神と母権のものであり、後の父権的ケルトの体系に取って代わられた後も保持されていた」と述べられている。主人公アイリーンの父親である王は、塔の上の曾祖母の女神と初めから関わりのあることが暗示されている。何か重要なことがあるときは人知れず階段を上り塔の上へ行っていることが示されている。

主人公のアイリーンが城の中の見たことのない階段を上がって行くと、そこには非常に年を取った女神が住んでいて、アイリーンが生まれたときからここにいるという。彼女は白い肌の美しい女性で大変若々しいのだが、銀色の流れるような長い髪と深い智慧にあふれる目をしていて。

Although her face was so smooth, her eyes looked so wise that you could not have helped seeing she must be old.<sup>9)</sup>

アイリーンの父である王は頼んで「塔の上のおばあさま」と同じ名前「アイリーン」を娘に頂いている。

“your papa, the king, asked me if had any objection to your having it; and, of course, I hadn't. I let you have it with pleasure.”<sup>10)</sup>

また塔の上の女神は主人公アイリーンの先祖であると云い、世話をするためにここへ来たことを述べる。

“I'm your great-great-grandmother, said the lady.

“What’s that?” asked the princess.

“I’m your father’s mother’s father’s mother.”<sup>11)</sup>

このように彼女はアイリーンの母系的な先祖であり、王権女神なのである。

### 3. 天上の女神ソフィア

ソフィアはギリシア神話やグノーシス神話で叡智 (Sophia-Wisdom) の女神とされているが、Bonnie Gaarden は「塔の上のおばあさま」をベーメのソフィア (Sophia) と同一視しており、アイリーンの内的自我であるという。

She is at once Irene’s historical ancestress, a supernatural power expressing itself in natural symbols, and Irene’s deepest Self.<sup>12)</sup>

ヤコブ・ベーメ (Jakob Boehm Jakob Böhme, 1575-1624) は、ドイツの神秘主義者であり、新プラトン主義に影響を受け、ドイツ観念論に影響を与えている歴史的な人物である。彼は人間の自我の内に経験的なものを超える理性、絶対者の存在を認めている。

また紀元 2~3 世紀にいくつもの宗教に結びつきドイツ観念論に大きな影響を与えたグノーシス主義<sup>注2)</sup>でも、人はその身体によってこの世に属するが、その霊によって神の世界に属しており、宇宙の根源的原理を認識することによって自己救済できると説く。つまり絶対的なものを人間の自我のなかに設定し、神の知性と人間の理性を根本的に同一とみなし、人間は自分を理性にまで高めることによって神との一致が得られると考えた。それがドイツ観念論へと受け継がれ、その影響を受けたマクドナルドは、‘As God within humanity’を持って、Gaarden が言うようにアイリーンの深層にある自我でもある「塔の上のおばあさま」を人間の心の中に内在する光、内的女神ソフィアとして表象したのである。グノーシス主義では、ソフィアは女性の姿であり、人間の魂に似ているが、同時に神の女性的な側面の一つでもある。

そのグノーシス神話には、ソフィアが (善の神) アイオンの 1 人であり、偉大な至高神である父の世界創造にあこがれて、自分も世界を創ってみたいと考え、偽りの神、デミウルゴス (ヤルダバオート)

を作った。デミウルゴスは地上の物質を使って、人間を作ったのだが動かなかった為、ソフィアは父の世界、つまりプレローマの世界から光を少し取り、人間の中へ封じ込めた。そのため、人間は自由に動きだせるようになったが、そのアイデアの世界の光のかけらのために、人間は天上の国、プレローマを恋こがれるようになり、このにせもの世界にいても、本物の普遍的な真理のかけらを見いだすことができ、そして死ぬときには、この世界の物質で出来ている身体から抜け出し、プレローマ<sup>注3)</sup>へ戻ることが出来るとされている。ソフィアは自分が生み出した神々に命じて、死すべき身体を作らせ、不死なる魂だけを父なる神からもらって創ったとされる。

このようなソフィアの落下と救済は、人間の魂の地上への落下と救済の神話元型となっている。これにより人間が「どこから来たものか」を物語り、「どこへ行く」ことになるのかを物語る。マクドナルドは、確かに彼の作品『お姫さまとゴブリン』の中で、「塔の上のおばあさま」に、人間を導く「智慧の女神ソフィア」のイメージを見いだしたのである。

#### おわりに

「塔の上のおばあさま」は、歴史的にカレドニア地方に存在していた母系の家系の王権女神であること、またマクドナルドがドイツ観念論などの影響を受けて創造した「智慧の女神ソフィア」の象徴であると思われる。これまで表象してきた地上的な大地母神的シンボルの上に、更に天上における智慧の女神ソフィアのシンボルの 2 つのタイプのグレートマザーがマクドナルドのファンタジー作品の中に存在することを見出した。そして水平軸上の大地母神の死生観である「大地より生まれ、大地に帰り、また再び新生するというもの」だけに留まらず、垂直上の天上の女神ソフィアの死生観である「アイデア世界から地上へ落下し、また救済されて戻るもの」、つまり人間はどこから来て、どこへ行くのかという普遍的な問いに対する 2 つの答えが、マクドナルドの物語の中に存在することが理解できるのである。

本稿は、日本カレドニア学会 2020 年度大会においての口頭発表に加筆修正したものである。(ながたけいこ)

<注>

- 注1) 王権女神とは男性の王の守護存在として女神を位置つけて、王権や国土・領土を象徴する王権の守護女神のことである。この女神は歴代の王の母ともされる。
- 注2) グノーシス主義とは、紀元1世紀の地中海世界において成立し、初期キリスト教に組み込まれており、ネオプラトニズムの影響を相互にしながら、4世紀には異端とされるが、地下水脈のように生き続け、ドイツ観念論へと受け継がれている。
- 注3) プレローマとは、至高神が創造した世界であり、ソフィアなどのアイオン、天使のいる世界のことである。イデア（真なる実在）の世界とも言える。

引用文献：

- ・ジョージ・マクドナルド『ファンタステス』ちくま文庫 1999年(1858)  
『北風のうしろの国』  
早川書房 1981年(1871)  
『お姫さまとゴブリン』  
岩波少年文庫 2003年(1872)  
『お姫さまとカーディ』  
岩波少年文庫 2003年(1882)
- 1) Greville MacDonald, *George MacDonald and His Wife*, London: Allen&Unwin, 412 (1924)
- 2) Bonnie Gaarden, *The Christian Goddess: Archetype*

*and Theology in the Fantasies of George Macdonald*.  
Maryland: Fairleigh Dickinson University Press,  
127 (2011)

- 3) バーバラ・ウオーカー『神話・伝承事典』山下主一郎訳、大修館書店 752 1988年(1983)
- 4) George MacDonald, *The Princess and Curdie*, Coachwhip Publications. 172 (1882)
- 5) 出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 6) Sutcliff, Rosemary, *The Mark of the Horse Lord*, Penguin Random House Children's UK. Kindle 版, 7 (1965)
- 7) 同上
- 8) ジョセフ・キャンベル『神の仮面』(The Masks of God) 山室静訳、青土社、53
- 9) George MacDonald, *The Princess and the Goblin*, Coachwhip Publications, 13 (1872)
- 10) 前掲9), 15
- 11) 同上
- 12) 前掲2), 126

参考文献

- ・木村正俊『スコットランド文学の深層』春風社 2020年
- ・大貫隆『グノーシスの神話』講談社学術文庫 2014年
- ・筒井賢治『グノーシス』講談社選書メチエ 2004年

